

令和元年9月号

◆池田亮二 選 ～アウトサイダーの句②～

世捨て願望

どうしようもないわたしが歩いている	山頭火
女に捨てられたうす雪の夜の街灯	放哉
家出した若い父さん冷奴	中鳥健二
いもうとの金魚たべた姉出てゆく	健二

放浪の俳人といえば山頭火、放哉がすぐ浮かぶ。名家に生まれ、東大や早大で学び、前途洋々でありながら、ドロップアウトし、山頭火は行乞、放哉は小豆島に沈潜の生涯をおくる。山頭火は妻子から逃げ出し、放哉は妻に棄てられたごとく、山頭火はそれを楽しむごとく、放哉は悲しくあきらめつつ。

対して昭和団塊世代の前衛俳人、中鳥健二の句は、趣が異なるようだ。「蒸発」という言葉が流行ったのは、高度成長の終わる昭和末の頃だったか。うっとうしい世間に嫌気がさしてどこかへ消えてしまう。せいせいしたのか、がっかりしたのか、男が一人、冷奴を食っている。わきにはせめてカップ酒くらい置いてあるはずだ。新宿や上野の駅や公園には家出人団地のように、ダンボールハウスがずらりと並んでいた。それらもいつの間にか消えた。あの父さんたちは、今どこで何をしているのだろう。

妹の金魚を食べて逃げていった姉は、もっとあっけらかんとして、放つといと開き直っている。妹の金魚というのは、妹の好きな人の暗喩かもしれないけれど、そんな深読みをすることもないのかも。家出したことも忘れて、二、三日で帰ってくるのかもしれない。

男と女

男と女あなさむざむと抱きあふ	井泉水
梅酒飲んで娘の婿を憎みたり	八束
桜の下胸張る女泣く男	六林男
もう会はぬ奴に鯛焼買うてやる	才守有紀

最初の三人は、いずれも大正生まれの男尊女卑的な教育を受けた世代。男も女も、愛しているのか憎んでいるのか、うじうじして分からない。その愛憎の狭間を詠むのが俳句の要諦と言われれば、そうですかというしかない。

対して、才守嬢は、俳句甲子園の埼玉予選最優秀賞という、パリパリの現代っ子。一番歯切れよく、からっとしている。さむざむと男を抱いたりしない。愛なんて鯛焼みたいなもんよ！ と。

音が聞こえるか

蝌蚪乱れ一大交響楽おこる	野見山朱鳥
--------------	-------

一瞬、何これ？ と考えて、そのうち池の中にうじゃうじゃ泳ぐオタマジャクシの中に五線譜が浮かび、奇妙な音楽が聞こえ始める。やはりあの時代（昭和初期）だから、ジャズやビートルズではないが、何か調子はずれの騒々しい音楽のように聞こえる。生命誕生の歓喜の歌か？ 音楽にうとい私には、残念ながらそれ以上には聞こえないけれど、聞こえる人には聞こえるのだろう。

襟巻の狐の顔は別にあり	虚子
寂しめば毛皮の狐コンと鳴く	仙田洋子

二句とも、襟巻を巻いている女と、巻かれている狐の対比だが、前者の狐は黙って死んでいるのに、後者の狐は鳴き声が聞こえるから奇妙である。それは悲しみの声か、人間の愚かさを笑う声か。虚子に聞こえない声が洋子には聞こえたか。

蝶墜ちて大音響の結氷期

赤黄男

これも何かシュールなフシギな句である。富沢赤黄男は、第二次大戦に兵士として参戦し、各地で凄惨な死線をくぐってきた俳人。「人多く死にたる丘の風と鳥」など多くの戦争俳句を残している。それらの中に、この句がある。

南太平洋を航行する巨大な空母を擁する大艦隊。その上空を小さなゼロ戦が舞っている。まさに蝶のように舞い蜂のように刺す、生還を期さない特攻機群。爆弾を抱いて真っ逆さまに敵艦に突っ込むものもあれば、すさまじい弾幕に阻まれて海中に落下するものも。その瞬間に発する大音響。どれだけの蝶が舞い墜ちたか！ ただし、これは私個人の解釈。

どうでもいいようなナンセンス

最後に、読者に好きな様に勝手に解釈してくれと投げ出したような句をご紹介します。正統派の花鳥諷詠とは、いささか次元の違うところにある作品だが、詠む人の感性と読む人の感性がシンクロすれば、それでよしとする句のようである。理屈はあとからついてくるのだ。

ほのかなる少女のひげの汗ばめる	誓子
青蛙ばっちり金の ^{まぶた} 瞼 かな	川端茅舎
右の眼に左翼左の目に右翼	六林男
太陽にぶん殴られてあったけえ	北大路翼
わしらみなアンチ巨人や月尖る	北大路翼
春風や恥より赤きドレス着て	中鳥健二
	(完)